

## 作業療法士と連携したセラピューティックレクリエーションサービスの一考察 高次脳機能障害支援における写真撮影の取り組み

茅野宏明 [武庫川女子大学]

作業療法士 連携 セラピューティックレクリエーション 高次脳機能障害

### 1. はじめに

不慮の事故や自殺未遂、あるいは脳疾患などにより、脳に損傷を受け、記憶障害や遂行機能障害、注意障害、失語、あるいは感情コントロールなどの機能に著しい障害が見られる「高次脳機能障害」への支援が年々必要とされてきている。厚生労働省では、平成13年度から本格的に「高次脳機能障害支援モデル事業」を実施し、現在では、主に①障害評価；②機能回復訓練；③社会適応訓練；④職能訓練；そして⑤社会復帰後の支援<sup>1</sup>などの事業を展開している。

医師、看護師、作業療法士、言語聴覚士、心理職、生活支援員、職能支援員、支援コーディネーター、ケースワーカーなどが、作業部会の主な構成員として事業を支えている。さらに、当事者団体との協働支援のほかに、地域におけるさまざまな機関や団体あるいは専門職が、支援コーディネーターを介して当事者やその家族を支えている。レクリエーション資格保持者は、これらの事業には関与していないのが現状である。

平成17年度報告書<sup>2</sup>では、高次脳機能障害支援事業に関わった当事者の平均年齢は、32.7歳と記され、受傷時年齢の平均は、29.8歳。また、同報告書には、外傷性脳損傷が76%、脳血管障害が17%、低酸素脳症が3%と示されている。特に、若年層においても、脳血管障害は常に高次脳機能障害の原因疾患となり得る、と報告書は示している。さらに報告書は、記憶障害(90%)、注意障害(82%)、遂行機能障害(75%)の症状が高い割合を示し、また複数の症状を持つことが一般的である、と示した。

受傷後、残存機能を生かすリハビリテーションサービスにおいて、ICFのもと、ゴール指向型リハビリテーションが取り入れられている。例えば、「訓練のために、歩行訓練」するのではなく、「人気レストランへ食事に出かけるために、歩行訓練」する。このように訓練のためよりも、生活意欲を向上するための支援が一般的になっている。

当事者が残存機能を生かしながら、生活意欲をさらに向上するため「社会生活力プログラム<sup>3</sup>」が社会リハビリテーションにおいて実施されている。日常生活における社会参加として「余暇」や「外出」もプログラムとして含まれている。特に、高次脳機能障害支援において「就業・就学準備支援」ニーズは高い反面、当事者自身で思いどおりの成果が出ない現実と直面することも少なくない。その結果、当事者のモチベーションは上がりず、無気力な状態（learned helplessness）で支援プログラムに参加している感も認められる。作業療法士が進める社会生活力プログラムは集団支援が基盤のため、一般的に無気力感を抱く当事者や他者との協働作業が困難な当事者へのきめ細かい対応は困難である。

また、当事者が最終的には、在宅支援や施設支援に頼らざるを得ない現状もある。そのような生活には、「余暇」や「外出」というテーマは重要な位置づけになる。就労や就学の代わりとなる日中活動、つまり余暇活動、への支援が重要になってくる。このように、集団支援に適応困難な当事者、あるいは無気力になった当事者への支援には、個々で対応する生活支援、特に余暇生活支援、が役に立つと考えられる。

高次脳機能障害支援事業報告書が示した平均年齢は若年層であり、受傷後も数十年にわたる人生があると推測される。生活支援や就労支援の必要性は高いことは明白であるが、主体的な余暇生活支援も同様に重要と考えられる。しかし、余暇生活支援を主体とするレクリエーションサービスが、直接的に高次脳機能障害支援事業に関わることはなく、訓練としての位置づけは皆無である。

そこで、平成 22 年 6 月より、社会生活力プログラム及び個別作業療法を実施する作業療法士と連携し、社会的リハビリテーションの一環としてセラピューティックレクリエーションサービスの個別支援を開始した。集団支援よりも、きめ細かな個別支援を導入し、入所目的の達成を助長することを意図とした。プログラム名は、参加への動機づけを高めるために「社会復帰プログラム（以下、CRP）」とした。

支援プロセスとして、リハビリテーションとの連携を意識し、次の 5 段階を設定した。

- ① プロセス指向型リハビリテーション<sup>4</sup>（訓練を振り返る）
- ② ゴール移行重視型リハビリテーション（嗜好を調べて試行し、振り返る）
- ③ ゴール指向型リハビリテーション<sup>5</sup>（自ら目標を立て体験し、達成度を振り返る）
- ④ 自己実現移行重視型レクリエーション（情報収集や資源活用して試行し、振り返る）
- ⑤ 自己実現指向型レクリエーション<sup>6</sup>（実践し、振り返り、実施を繰り返す）

本研究の目的は、高次脳機能障害支援において、作業療法士と連携したセラピューティックレクリエーションサービスの個別支援（写真撮影）の成果を検証することである。

## 2. 方法

- (1) 研究対象施設：障害者支援施設（高次脳機能障害支援事業の実施施設）
- (2) 研究期間：2012 年 2 月 6 日～2012 年 9 月 24 日
- (3) 支援頻度：原則的に週 1 回、45 分間のセッション
- (4) 連携頻度：2 ヶ月に一度、作業療法士 2 名とケースカンファレンス実施  
必要に応じて、作業療法士はセッションに随時参加
- (5) 支援計画：作業療法士との連携において、2 ヶ月間の支援目標を設定  
支援目標に適した具体的な実施計画を研究者が立案
- (6) スタッフ：支援員 1～2 名、女子大学生（含短大生）6 名、男子実習生 1 名
- (7) 支援体制：利用者 1 名に対して、スタッフ 1 名～3 名
- (8) 研究対象者：男性 40 歳。H22 年 8 月、右片麻痺症状により救急搬送（脳内出血）  
手先が不器用で家業（精密金型製造）は継げず、派遣業に就く。

◇復帰目的：家庭復帰

◇利用目的：社会適応訓練、体力持久力増進、車いす操作訓練、立位歩行訓練、OT、PT、ADL

◇課題：①高血圧に起因する再出血のハイリスク

②注意障害、記憶力障害、病識欠如に起因する日常生活能力の低下

③失語に起因するコミュニケーション障害（社会的交流が苦手）

◇現状：①声かけして訓練に参加

②人工的な笑顔

③特異的行動（TPOが一般的な見解とずれる）

- (9) 作業療法士と連携したCRPでの到達目標

①他者との関係づくり (establish interpersonal relationship)

②自分で何かを決めて実行する機会を提供 (motivate recreation activities)

(10) 本研究における支援目標

◇自分で何かを決めて実行する機会を提供 (motivate recreation activities)

(11) 支援段階

◇ゴール移行重視型リハビリテーション (日中活動への興味関心づくり)

(12) 支援課題

余暇生活診断テストスケールGの集計結果：知的・言語的活動<sup>9</sup>、美術・手工芸<sup>8</sup>、野外・自然<sup>7</sup> → 写真の撮影とアルバム作成を支援手法として選択した。

①-1 訓練中の場面などを自由に撮影； -2 アルバムを完成

②-1 撮りたいものを撮影； -2 アルバムを完成

③-1 敷地内で思い出ある場所を撮影； -2 フォトフレームを完成、-3 アルバムを完成

(13) 支援材料：レンズ付きフィルム、アルバム、フォトフレーム

(14) 意図的支援

①アルバム作成時、撮った時を振り返り、その時の考えや感じ方を受容と共感

②アルバム作成時、主体的に分類したり、ラベルをつけたりすることを促進

③フォトフレーム完成時、賞賛とプログラムプロセスの共有

(15) 倫理審査：学校法人武庫川学院平成23年度第3回研究倫理委員会において、条件付承認を受け、判定条件にしたがって指示資料を修正し提出した。

(16) 同意書：H23年10月21日付で研究対象者が同意書に署名し、研究者に提出した。

### 3. 結果と考察

(1) 支援課題の達成度

①-1 訓練中の場面などを自由に撮影・・・(平成24年2月6日に達成)

-2 アルバムを完成・・・(平成24年2月13日に達成)

【言動】

①自ら写真を分類し、タイトルをつけて、アルバムを完成した。

②場面：施設外のロードワーク訓練風景、クッキング実習風景、自室の風景、スタッフの撮影

③アルバムにそって、撮影場面の様子をスタッフに説明した。

②-1 撮りたいものを撮影・・・(平成24年4月16日に達成)

-2 アルバムを完成・・・(平成24年4月23日に達成)

【言動】

①自ら写真を「良い」「ダメ」と分類し、厳選した写真でアルバムを完成した。

②場面：週末に自室へ訪ねてきた両親、開花している桜

③アルバムにそって、撮影場面の様子をスタッフに説明した。

③-1 敷地内で思い出深い場所を撮影・・・(平成24年9月10日に達成)

-2 フォトフレームを完成・・・(平成24年9月24日に達成)

-3 アルバムを選択し、完成・・・(平成24年9月24日に達成)

【言動】

①場面：駐車場で気に入った車と一緒に撮影、施設の玄関

- ②全課題の写真から、トップ3（両親、桜、車と自分）を選んだ。
- ③フォトフレームの枠に「頑張るぞ！」と日付を記入して完成した。
- ④アルバムはビーチ柄を選択し、気に入った写真を選択して完成した。

## (2) 行動変容

### ◇プログラム初期

訓練室の扉から挨拶だけして閉める言動が繰り返された。その後、入室して数分で「すみません」と言い残し退室する。回を重ねる毎に、ワークシートやパズル等の作業を導入し、45分間過ごすことができるようになった。

### ◇支援課題①

自室や気になったチラシを撮影する行動は、換言すれば、プライベートを公開する意図とつながる。自らを閉ざしていた言動からの解放と感じられる。これを機に、スタッフの意図的な関わりにより、利用者の興味や関心の話題が広がりをみせた。

### ◇支援課題②

両親の写真には、スタッフ一同驚いた。さらに踏み込んだプライベートの公開につながる。また、開花した桜を撮影するのに、施設のベランダを往来して撮影したことも写真から読み取れる。他方、課題提出期限のため一気に撮影したとも解釈できるが、課題を認知し、達成しようとする行動であったと考えられる。

### ◇支援課題③

車は好きだが、運転習熟訓練は不可であった。駐車場の多種多様な車種をいつでも見られる施設からの退所は、本人の惜別感とつながる。気に入った車とのツーショットをスタッフに撮影依頼、手を高々と挙げるポーズ、厳選した車など、そして、メッセージから利用者の思いや願い、あるいはニーズなどの一端を理解することが可能である。

## 4. まとめ

作業療法士は「継続して参加した訓練はCRPだけである」、「集団訓練にも自分から参加するようになった」、「廊下で、他の利用者とは会話している場面をみるようになった」などと変化を指摘した。不器用さから失敗経験が多く、他者との関係を拒み、家業を継ぐことも断念した過去を経験した利用者。利用者は、スタッフとインフォーマルに交わる雰囲気をもつCRPに居場所を見つけ、自己表現や話題性を拡張したと考えられる。

セラピューティックレクリエーションサービス的手段として選択した写真撮影は、自己表現や他者との関係づくりにおける行動変容、あるいは内的動機づけに対する評価ツールになると考えられる。今後、高次脳機能障害支援事業の一環として、きめ細かな個別支援を提供できるレクリエーション支援の試みの必要性が感じられる。

1 国立身体障害者リハビリテーションセンター(2005).平成16年度高次脳機能障害支援モデル事業実施報告。

2 国立身体障害者リハビリテーションセンター(2006).平成17年度高次脳機能障害支援モデル事業実施報告。

3 奥野英子他(2006).自立を支援する社会生活力プログラム・マニュアル、中央法規出版。

4 橋本圭司(2007).高次脳機能障害がわかる本、法研。

5 大川弥生(2004).新しいリハビリテーション、講談社。

6 Austin, D.R.(1998).The health protection/health promotion model. Therapeutic Recreation Journal, 32(2), 113.